

ザンビアに暮らしてみても

NOWSPARプロジェクトアシスタント

野口 亜弥

初めに

初めまして。野口亜弥と申します。2015年の1月にザンビアに来て、同年の6月末までの約半年間、現地のスポーツ NGO である NOWSPAR (ナウスパ) のプロジェクトアシスタントとしてインターンシップをしていました。ザンビアに来る前は、スウェーデンでプロサッカー選手として活動し、アメリカの大学院にも進学していたので、海外の生活（特に、欧米での生活）や文化の違いには慣れていましたが、初めての開発途上国、アフリカ大陸での生活をここザンビアで送ることができ、いかに自分自身が世界で裕福とされている3分の1のグループの価値観しか知らずに生きてきたのかを身を持って感じることができました。短い期間でしたが、大変貴重な6ヶ月となりました。ここでは、私の経験したザンビアでの生活とインターンシップを通して見えた女性とスポーツについてご紹介していきたいと思います。

女性スポーツ NGO NOWSPAR (ナウスパ) とは

まず、スポーツ NGO と聞いてはっきりとしたイメージを持つことは難しいかと思いますが、スポーツ NGO とはスポーツをツールに国際問題の解決に取り組んでいる組織です。私が所属していたナウスパ (NOWSPAR: National Organisation for Women in Sport, Physical Activity and Recreation) は女性スポーツ NGO であり、1) スポーツ界における女性の権利を擁護する、2) スポーツを通して女性の権利を擁護することの2つを目的として2006年に設立された組織です。スポーツ界に置ける男女平等を促進するために、各スポーツ協会やスポーツ団体、スポーツ NGO に対して男女平等やセクシャルハラスメントの規定の作成と実行のサポートなどを行っています。また、スポーツを通して女性の人権についての説明やワークショップを行い、その人権が犯されたときに(性的暴力など)どのように、自身の安全を守りながら、権利を主張し、助けを求めるかのプロセスも教えています。さらに、HIV/エイズウイルス、妊娠出産、保健衛生についての知識や、コミュニケーション能力、リーダーシップ能力の開発、コンピュータースキルの教育なども、スポーツを通して10代の若い女性たちに教えています。ザンビアでは学校で性教育を教えないので、子供達は、どのように妊娠し出産をするのか、エイズから身を守るためにどうしたらいいのかといった教育をきちんと受けていません。従って、NGO がその役割を担うことが多いのですが、若年



層を惹き付けることができるスポーツが教育のツールとして利用されることが多くなってきています。ナウスパは主に女の子、女性をターゲットにしていますが、青少年育成を目的としているスポーツ NGO もザンビアにはいくつか存在しています。

女性と少女に人気のスポーツ

ザンビアの男性に一番人気のスポーツはサッカーです。毎日のように新聞のスポーツ欄ではザンビアのサッカー男子代表の話題があがり、イングランドのプレミアリーグやイタリアのセリエ A の話題も注目されています。一方で、未だ社会的にスポーツに参加することを好まれていない女性や女の子は、男性や男の子と同じようにスポーツをする機会に恵まれているわけではありません。特に田舎に行けばいくほど、スポーツは男性がするものという認識が強く残ります。そんな状況の中で女の子に一番人気のスポーツはネットボールです。これはバスケットボールを女性用に改良して作られたスポーツであり、女性用のスポーツであることが後押しをして、多くの女の子たちにも親しまれています。また、意外なことに女子ボクシングもメディアからの注目度は高く、**Esther Phiri** 選手がスーパーライト級世界チャンピオンになったことから、ザンビアの特に低所得地域に住む女の子たちの中で女子ボクシングが少しずつ広がっています。女子サッカーもだんだんと人気が出はじめており、女子サッカー代表チームは **Shipolopolo** という愛称で呼ばれています。これは男子サッカー代表チームの愛称である **Chipolopolo**

が由来となっています。私は、サッカーをずっとしてきたこともあり、滞在中にザンビアのコンパウンドと呼ばれる地域で女子サッカーの指導もやらせていただきました。



コンパウンドの生活

ザンビアの首都、ルサカではコンパウンドと言われる無計画居住区が多く存在しています。ここは政府が計画的に居住区を整備していない土地で、農村から出稼ぎにきた人たちや、都市部でも低所得の家族がこの地区に住んでいます。コンパウンドは沢山の人が密集して生活しており、水道、電気、トイレ、ゴミ処理施設など整っていない場合が多いです。私がザンビアの空港についてまず初めに連れて行ってもらった場所がコンパウンドであったので、何の知識もなかった当時、ザンビアで暮らしていけるのか正直不安に思ったのを覚えています。私は、サッカーコーチとしてカリングリガ

(Kalingalinga) で、サッカー選手としてバウレニ (Bauleni) で、2地域のコンパウンドの子供たちと関わることができました。カリングリガではナウスパから派遣される形で EduSport カリングリガというスポーツ NGO の女子サッカーコーチをしていました。最初は、「よそ者がきたぞ！」という目

で住人には警戒されていましたし、私も警戒してしまいましたが、定期的に通っていると、住民の方々に私が何をしにここに来ているのか分かっていただき、気さくに声をかけてくれるようになり、子供たちも懐いてくれました。



サッカーの指導中は初めての経験の連続でした。まず、物がありません。ボールがない。コーンがない。靴がない。人数も30人いたり1人しか来なかったり予想ができません。各スポーツ NGO によって運営状況はもちろん異なりますが、私が教えていたチームはこのような状況でした。ボールはいつも借りていたのですが、1個借りられるのがやっとで、30人で1つしかボールがない時もありました。コーンは代用品として紙パックのお酒の空き箱がフィールドに沢山落ちていたので、子供達にそれを拾ってもらい、砂を入れ、毎回10個ほど作ってもらっていました。靴はないので裸足が当たり前。フィールドもでこぼこの固い土でガラスの破片も散らばっています。日本ではまずあり得ない状況ですが、危ないから靴を履きましょうと言ってしまったら靴を買うお金がないので、サッカーができなくなってしまおうし、危ないからこのフィールドではプレーしないようにしましようと言ってしまったら運動ができなくなってしまいます。子供たちは裸足で運動することは既に慣れっこになっていて元気に駆け回っていました。また、フィールドではチンポンブワというボールを蹴っている子供も良く見かけました。これはサッカーボールを買うことのできないザンビアの子供たちが良く使っている手作りのボールです。作り方はスーパーで買う精肉などの台紙になっているトレーを細かくきって、ボールの芯にし、何枚ものビニール袋を重ねて、熱でビニール袋を焼いてくっつけて丸い形にしていきます。思っていたよりも出来上がりが良くて、初めて見た時は驚きました。



コンパウンドの子供達と関わる回数が増えるにつれ、コンパウンドの生活も見えてきました。ザンビアの公立学校は半日ですので、午前中に学校に行く子供たちと午後学校に行く子供たちに別れています。たいていどの家庭も女の子は学校に行く前に家の手伝いをします。食器洗いや、家の周りの掃き掃除、水汲みなどです。午前中に学校のある子供は、朝5時や6時に起きて家の仕事をしてから学校に行くそうです。一方で男の子はあまり家の仕事はしません。家の仕事は女性の仕事というステレオタイプがあるようで、妹が掃き掃除している横でお兄ちゃんがサッカーしているなんて光景は良く見かけます。コンパウンドのような低所得地域では男女の伝統的役割が根強く残っており、そのステレオタイプに変化を与え、女性のエンパワーメントを

進めるには大変時間がかかります。コンパウンドに住む家族は低所得層なので、中等教育以降、学校に通うことが難しく卒業しても安定した職を得ることはなかなかできません。女性は早めに結婚して、子供を産み、家族の収入の足しにマーケットで野菜などを売ります。コンパウンドの中でもさらに所得の低い家族にあった時は、9歳の女の子が産まれたばかりの赤ちゃんを背負い、洗濯と食器洗いをし、留守番をしていました。彼らと会話をし、知れば知るほど、貧困から抜け出すのは難しい状況なのだと言うことが分かってきました。



ザンビアでのホームステイ

最後に少しだけ、私のホームステイのことについて紹介します。私は、幸運にもザンビア人の家庭にホームステイをさせていただくことができました。中流家庭のお家だったので、低所得地域とは違い水道も電気も整備されていましたし、家が密集していることもありませんでしたが、水と電気は頻繁に止まっていました。そんな不便にも慣れているご家族は、常に水は蓄えているし、電気が消えたら、ロウソクを灯し、外でバーベキューをして夕飯にしていました。一時期、断水が酷い時は、雨が降ったらバケツを外に並べて雨水を蓄えていました。シャワーはないので、バスタブに水を貯めて桶で身体を流します。洗濯機がないので服は毎回手洗いをします。親戚が遊びに来たら何日も泊まって、いつ帰るのか分かりません。（ザンビアでは、身内同士でも帰る日を聞くことは失礼だそうです）日本での生活と比べると不便だなと感じてしまうことがあるかもしれませんが、私は、極力比べることはせずに、「これが普通」と考えて生活することを心がけていました。こういう生活になれているザンビア人は停電しようが、断水しようが、その状況を工夫して打開し、なおかつ楽しんでいるようにも見え、インフラに恵まれている国よりもよっぽど生活力が高いと感じていました。



最後に

ザンビアはとても安全でおおらかな人たちが陽気にのんびり暮らしている国です。待ち合わせで待たされることは毎度のことですが、基本的にみなさん悪気は全くありません。遅れることが普通です。日本の文化とは大きくことなりますが、日本の文化のほうが良くはたらく場面もあれば、ザンビアの

文化の方が良くはたらく場面もあります。どちらがいいなど考えずに、彼らの文化を楽しむ余裕を持って生活することが大切だと思いました。